

氏名（本籍）	神山 努（栃木県）
学位の種類	博士（障害科学）
学位記番号	博甲第 9639 号
学位授与年月	令和 2 年 5 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	自閉スペクトラム症児に対する家庭中心型の ペアレント・トレーニングに関する研究
主査	筑波大学教授 博士（教育学） 野呂文行
副査	筑波大学教授 博士（教育学） 柘植雅義
副査	筑波大学准教授 博士（教育学） 小林秀之
副査	筑波大学准教授 博士（心身障害学） 佐島毅

論文の内容の要旨

神山努氏の博士学位論文は、自閉スペクトラム症（以下、ASD）の子どもをもつ保護者に対するペアレント・トレーニングにおいて、保護者の実施負担を軽減し、家庭内での支援の実行可能性を高める家庭中心型プログラムの開発を目指したものである。その要旨は、以下の通りである。

第1章で著者は、研究の背景を5つの節に分けて説明している。第1節で著者は、ASD児の保護者が他の障害の保護者と比較して高いストレスを有しており、子育て支援の必要性が高いと述べている。また第2節で著者は、ペアレント・トレーニングに関する先行研究を概観し、実施形態（個別・小集団等）、指導の提供方法（対面・遠隔等）、技法を学ぶ方法（講義・演習等）という観点で整理している。さらに保護者がドロップアウトせずに継続参加が可能な指導法の開発が必要であると指摘している。第3節で著者は、ASD児の保護者に対するペアレント・トレーニングの効果は、一定程度は実証されているものの、家庭内での効果継続のためには、保護者の負担の軽減が必要であると指摘している。また第4節で著者は、我が国の児童発達支援事業所等でのペアレント・トレーニングの普及状況が十分ではないことを指摘している。そしてその普及を促すためには、実施者の負担が低いプログラムの開発が必要であると述べている。さらに第5節で著者は、保護者の負担が低い方法のひとつに、「家庭中心型ペアレント・トレーニング（family centered parent training；以下、FCPT）」があることを指摘している。その中で著者は、FCPTの特徴として、参加した保護者の実施負担を考慮した計画を立案する点にあると説明している。一方で、FCPTの課題として著者は、保護者が学んだ介入計画を新規場面で自発的に活用できるよう支援する必要があることを指摘した上で、それを達成するための方法として、保護者によるABC分析（Antecedent-Behavior-Consequence）の実施とそれに対する支援者のフィードバック（以下、ABC分析とフィードバックを総称して「フィードバックシステム」とする）を付加することの可能性について述べている。

第2章で著者は、本研究の目的と全般的な方法について述べている。著者は本研究の目的として、知

的障害を伴う ASD 児とその保護者に、従来の FCPT にフィードバックシステムを付加したプログラムを実施し、ASD 児が行動変容を示すかどうか、ならびに保護者が介入計画を新規場面で活用できるかどうかを検証することと述べている。さらに児童発達支援事業所の支援員による、FCPT の実施可能性について検証することも本研究の目的であると述べている。研究目的に続いて著者は、研究に参加した 19 名の ASD 児のプロフィール、研究実施のための説明と同意の手続き、そして本研究におけるペアレント・トレーニングの標準的な手続きについて説明している。

第 3 章で著者は、研究 1 として、フィードバックシステムを付加した FCPT の手続きとその効果を検討する探索的研究について述べている。4 組の親子を対象とした結果、フィードバックシステムを付加した FCPT は、保護者記録に基づいて、介入計画の修正に必要なフィードバックを定期的に提示することで、介入計画の柔軟な変更が可能となり、子どもの適切行動が促進可能であることを明らかにしている。さらに保護者に新規な場面でも行動記録を実施するように要請することで、特別なトレーニングなしに介入計画の新たな活用が生じることを明らかにしている。

研究 1 の課題として著者は、家庭内での行動変容に関して、保護者自身の記録のみに基づいて分析を行っており、その記録の信頼性のチェックを行うことができていない点をあげている。そこで第 4 章で著者は、研究 2 として家庭内での保護者と子どもの行動をビデオ撮影し、そのデータに基づいて効果検証し、研究 1 と同様の結果を得ることができたことを明らかにしている。

第 5 章で著者は、小集団形式での FCPT の効果検証を行った研究 3 について記述している。8 組の親子が参加し、7 名の子どもの適応行動の獲得に成功したこと、またすべての保護者が FCPT に肯定的評価を示したことを報告している。また残りの 1 組の親子に対しては、個別形式で FCPT を実施し、適応行動の獲得を促すことが可能であったと報告している。この結果から著者は、最初に小集団形式で FCPT を実施し、それで効果がみられなかった参加者に個別形式で対応する「階層的支援システム」の導入が、多様な対象者に効果を示すために重要であることを明らかにしている。

第 6 章で著者は、児童発達支援事業所の支援員による FCPT の効果を検証した研究 4 について述べている。参加した 4 組中 3 組の親子において、行動変容がみられたことを明らかにしている。また参加した保護者の主観的評価では、研究 3 と比較して、参加の負担感が高い結果であったことを報告している。

第 7 章で著者は総合考察の中で、フィードバックシステムを付加した FCPT プログラムが、ASD 児の家庭内での行動変容をもたらしたこと、保護者が学習した介入計画を新規場面で活用可能であったことを記述している。さらに著者は、それらの結果を導くことが可能となった要因について、応用行動分析学における行動随伴性に基づく分析を行っている。その中で修正フィードバックが結果事象としてだけではなく、新しい介入計画の先行事象として機能していたこと、支援者から記録を要請されることで、保護者が子どもの行動の先行事象と結果事象に着目できるようになり、新しい場面でも介入計画の活用が可能となったこと、保護者の負担が少なかったことが支援員のプログラムの実行可能性を高めたことなどを明らかにしている。

審査の結果の要旨

(批評)

ASD 児の保護者に養育スキルを指導するペアレント・トレーニングの必要性が高まる一方で、家庭内で実際に学習した養育スキルを発揮できているのか、それを発揮させるために必要な条件は何であるのか、という点を明らかにすることが研究課題となっていた。神山努氏の博士学位論文は、家庭中心型ペアレント・トレーニングにフィードバックシステムを付加することにより、個別・小集団の両方の形式で、ASD 児の家庭内での行動変容をもたらされることを明らかにした点で高く評価できる。さらに研究者だけではなく、児童発達支援事業所の支援員においても、その効果が再現できたことから、著者の考案したプログラムの汎用可能性を示すことができた点も高く評価できる。

令和 2 年 4 月 1 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。